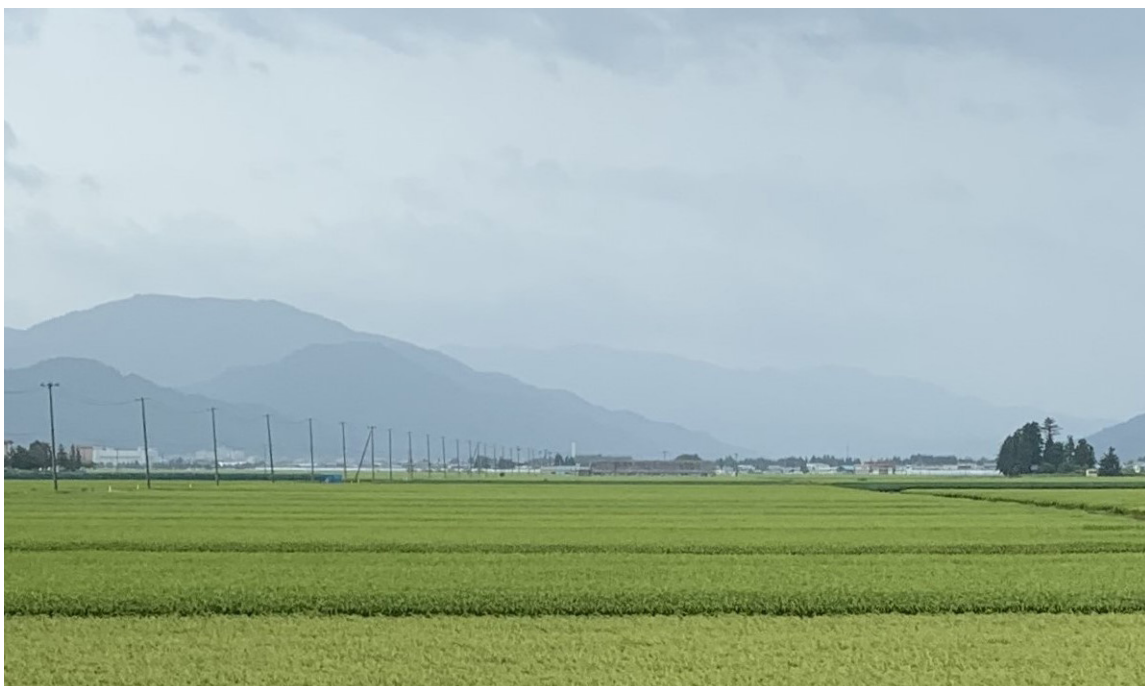


# 高3の12月に 家庭科の先生になることを決めた

この教科書の編集協力者

椎谷千秋



実は、ずっと国語の教員になろうと思っていました。しかし、大学入試の出願が迫ったある日、「本当にこれでいいの…?」と思い悩み、立ち止まってしまいました。もともと食物のことを学びたいと思っていたはずではないかと。数日悩んだ結果、高3の12月に志望を国語専修から家政専修へと変えたのです。家族もびっくりしていましたが、私の決断を最終的に受け止めてくれました。この決断がなければ家庭科に関わることはなく、国語の教員として教壇に立っていたかもしれません。あれから20数年。高3時の決断で人生が決まるわけではなく、いつでもなりたい自分になれると分かったのはずいぶん後になってからでしたが、このとき家政専修に希望進路を変更した自分に感謝しています。

写真は、高校卒業まで過ごした私のふるさとです。この田舎道を片道40分かけて自転車で通っていました。学校が坂の上であり、夏は汗だくできつかったことを覚えています。冬は雪が降り積もるため、家族に送り迎えしてもらっての通学でした。一度だけ家族が迎えに来ることができず歩いて帰宅したことがあります。片道2時間半かかりました。それも今はよい思い出です。信号もお店もほとんどなく見渡す限り田んぼばかりですが、大人になった今、ふとしたときに思い出すのはこの風景です。